

== 特集 =====

病理認定医試験合格体験記

岩手医科大学病理学講座分子診断病理学分野 無江 良晴

平成25年7月末に施行されました第31回病理専門医認定医試験におきまして、無事合格することができました。通知を受け取った際には合格の喜びは勿論ですが、小心者の自分としては「もうあの独特の緊張感が漂う試験を受けなくていいんだ」という安堵の気持ちが強かったと記憶しています。今回この合格体験記を執筆する機会を頂き、微力ながら今後病理医を目指す先生方の参考になればと思ってお引き受けしました。今回の試験で私の行った対策等について記します。

今回の試験に臨むにあたり、まず試験本番に至るまでの試験対策の工程表作成から行いました。これは試験本番までの数か月間、日常の診断業務の標本を月毎に各臓器別に分けて重点的に診断・学習をするというものです。この工程表に基づいた勉強を行うことで、自分が苦手とする脳腫瘍や血液疾患について理解を深める良い機会となった他、その他の疾患についても診断業務での知見を試験勉強の知識とリンクされる点でとても有意義でありました。

自主学習では病理アトラスや専門書による知識の取得は勿論ですが、特に顕鏡問題対策に力を入れました。この対策については、本教室の病理スタッフや大学院の先生方の協力で集められた数百種に及ぶ教育用症例標本集が非常に役立ちました。この症例集からランダムに標本を抽出し、1症例毎に制限時間を設けて解答する練習を反復して行いました。これは個々人で考え方に違いはあるかと思われそうですが、私は「病理学的な知識量」と「実際に顕鏡して所見を判断する能力」は別物であると考えています。試験本番では一問につき1分弱で所見を判断して解答を書き込むことになるので、予め実際の試験形式に則した時間間隔に頭と体を慣らしておくことは重要だと考えます。この「試験形式への慣らし」はそのまま剖検問題対策にも当てはまります。本教室では原則として英語表記の解剖レポートを作成しますが、これと並行して試験の解答形式に則した日本語表記の病理所見のまとめや病態解説、病態フローチャートの作成を行うことで、効率的に剖検症例の勉強を進めることができました。加えて病態フローチャートの作成や病態解説には臨床的な知識が必要な場合が多いので、医学部6年時以来約10年ぶりにyear noteを買い直したり、朝倉内科を読み返す等をしておりました。

その他過去問の検討や病理セミナーへの参加、そもそも受験する為の各種書類の準備等、こうして振り返ってみると、諸々の至らなさに恥じ入る反面、自分にしてはよく頑張ったじゃないかという想いも湧いてきます。この体験記が今後試験に臨む先生方の発展の一助となれば幸いです。

最後になりますが、今回の試験に臨むにあたり御指導下さった教授を始め本教室の先生方、教材集めに協力してくれた大学院生、何かと便宜を図ってくれた検査技師の皆様がこの場を借りて深く御礼申し上げます。

病理専門医試験・合格への道のり

北海道大学病院病理部 菅野 宏美

私は2年の臨床研修終了後、出身大学の北海道大学医学研究科腫瘍病理学分野の田中伸哉先生のもとで4年間、大学院生として病理学の基礎と脳腫瘍研究を学びました。大学院を卒業後の今年4月からは北海道大学病院病理部で松野吉宏先生のもと診断病理学を学び始めたところです。大学院生時代は病院病理部に比べて診断件数が少なく、また脳腫瘍というある種、特殊な腫瘍ばかりを見ていましたので、専門医試験受験にあたってこの経験症例の偏りが不安要素でした。かつ、専門医受験年度に部署を異動しましたので新しい職場に慣れることで精いっぱい、試験勉強を始めたのは2~3週間前でした。時間がありませんでしたので恥ずかしながら鑑別診断カラーアトラスのみを通読することにしました。

結局、カラーアトラスを一回通読したのみで、細胞診の勉強はほとんどしないまま、当日を迎えました。I型、II型問題は自分の感覚としては6割ほどしか正答できなかったように思いましたし、III型問題では記載事項を勘違いしていたりと、かなりひやひやしましたが、結果として合格の通知をいただけることになったのは面接試験で救っていただいたためかもしれません。

受験まではかなりの不安がありましたし、実際、それほど良い出来ではなかったかもしれませんが、合格通知をいただいて思うことはこれまでに在籍した腫瘍病理学分野や北大病院病理部、そして外勤先の手稲溪仁会病院で教えていただいたことが全てだったということです。特に大学院生時代に約80件もの病理解剖を執刀する機会があったことはIII型試験に直接役立ちましたし、今考えれば恵まれた環境であったと思います。これまで指導して下さった田中伸哉先生はじめ北海道大学医学部腫瘍病理学講座の先生方、松野吉宏先生はじめ北海道大学病院病理部の先生方、そして手稲溪仁会病院 篠原敏也先生、野口寛子先生に深く感謝いたします。

今後は専門医として自身で診断のサインアウトをしていかなければならない身となりました。試験前に系統的な勉強が出来なかった分、専門医となった今こそ一から勉強を始めていかなければと感じています。不安と重圧は否めませんが、これはこれまで専門医となられた全ての先生方が通った道かと思えます。病理学の道を楽しみながら一歩ずつ精進してまいりたいと思います。

病理専門医を受験して

慶應義塾大学病院 病理診断部 辻川 華子

過去の体験記にとっても勇気づけられたので、拙いながらも書いてみたいと思います。

私は出産、子育てもあり、最短で受験可能な年には解剖症例数が足りず、一年遅れて今年専門医試験を受験しました。一番苦労したのは、解剖症例集めです。なかなか集まらず、足りたと思って申請に使えない施設の症例が含まれていたり(!)と、解剖には愛されませんでした…。ですが、関連病院にもご協力いただき、最終的には必要数以上に揃える事ができました。後から振り返ると、多数症例を経験でき、III型試験に向けて短時間でまとめる練習になったと思います。

今年、同じ施設から4人で受験できたことは大きな励みになりました。複雑極まる受験申請書類の提出前のチェックや資料のコピーに加え、4人で分野を分担して、主要なスライドを集めて見ることができたのは大変力になったと思います。また幸運なことに私は今年4月から診断部配属となり、日々の標本を通して様々な事を学ぶ事が出来ました。

試験勉強に関しては、平日は通常業務と子供のお迎えで勉強の時間を取るのが難しく、夫と3歳の子供の協力を得て、5月からの休日を全て勉強にあてました。私は過去問以外には下記を行いました。

- ・組織病理アトラス、病理診断アトラス3冊、彩の国さいたま病理セミナー冊子(写真を見て全ての疾患名を書いて覚える)
- ・病理と臨床のCPC症例解説及びマクロクイズ全て、ポリクリ用剖検例、自分の剖検症例(自分で再度記載してみる)
- ・主要な疾患および学生実習用、サージカルカンファ(当院で定期的開催)のスライド

また研修要綱の疾患を網羅したパワーポイント作成にも挑戦しました。完成しなかったものの、試験前に苦手分野を見直すのに役立ちました。

試験では、試験委員の先生の「決して難しい問題ではない」との言葉に、自分にだけ難しかったらどうしようとかかなり緊張しました。緊張のせいか、IIc問題で解答欄を間違えて書き始め、5問目くらいで気付いた時は人生で最高に焦りました。ですが、その後はなんとか冷静に回答するように心がけました。

それも有り、合格した時は本当に安心しました。特に研究室の坂元教授にご報告した際には、報告した方の中で一番喜んでいただき(私の主観ですが)、心から嬉しく思いました。教授に「今夜は帰ってシャンパンで乾杯だね」と言われたものの、残念ながら夫が当直だったため、その日は子供とジュースで乾杯しました。

最後に坂元教授、岡田教授をはじめ病理学教室の方々、体験記を書く機会を与えて頂いた亀山先生並びに診断部の方々、常日頃お世話になっている技師の方々、大量の過去のスライドを出して頂いた診断部の事務の方々、いつも気を配ってくださる病理学教室の事務の方々、関連病院を含め、応援して頂いた方々皆様に感謝いたします。まだまだ未熟ですが、今後も頑張りたいと思います。

病理専門医試験に合格して

鈴鹿中央総合病院 病理診断科 内山 智子

この度、病理専門医試験に無事合格することができました。これから受験される先生方のご参考になればと思い、私の経験を書かせていただきます。

私は卒後3年目より現在勤務している病院で病理研修(と育児)を開始しました。当初は、業務もログにこなせず、家に帰れば子どもの世話と家事のため、分単位で時間に追われ、毎日疲れ果てていました。「勉強しなければ」という焦りだけがつのり辛かったのですが、そんな日々も子どもの成長とともに落ち着き、少しずつ試験に気持ちが向いていきました。

具体的には、試験約1年前から仕事の合間にアトラスや癌取扱い規約を眺めるようにし、また過去の標本を検索し、試験に出題されそうな症例は技師さんに頼んで自分用の標本を作製してもらいました。また数十年前(!)のセミナーで配布されたという典型例や稀少例の標本を指導医に見せていただきました(古い標本でも色あせることなく十分に観察可能だったので感動しました)。更に彩の国さいたま病理診断セミナーをはじめ、可能な限り講習やセミナーに参加するようにしました。育児中は都合がつかず参加できないこともあると思いますが、我が家では夫が全面的に協力してくれました(旅行気分について来てくれることも多いです)。専門医試験には、比較的稀な疾患も出題され、当院のみの経験では不足する部分もあったと思いますが、上記のような方法で補うことができたと思います。試験直前には、義父母の協力も得て休日に数時間子どもを預け、集めた標本を繰り返し検鏡しました。更に有難いことに、勤務時間中に勉強時間を確保できるように指導医にご配慮いただきました。

上記のような対策の結果、何とか合格できましたが、試験本番、特にIII型問題では勉強不足を痛感させられました。当院も例にもれず近年は解剖数が減少しており、必要数は何とかクリアできたものの経験不足のまま本番を迎えました。III型問題では「見えないものは書かない」が鉄則らしいのですが、本番ではついつい昔のクセが出て(?)ああでもない、こうでもないと考えすぎ、根拠のない疾患名を書きすぎてしまいました。しかし面接の時間までに冷静になることができたので、修正することができ、面接官に救われたと思います。

これまで村田先生、馬場先生のお二人の指導医の先生には、私の傍若無人な振る舞いにもめげずに温かく見守っていただき、感謝しています。また、白石教授はじめ三重大病理部の先生方には、たびたび勝手なお願いやコンサルテーションを聞き入れていただきました。三重病理医会、東海病理医会の先生方には優しくご指導いただきました。感謝申し上げます。

最後になりましたが当院の細胞検査士・病理検査室技師の方々には、いつも私の我儘を100%受け入れ、日々の業務を支えていただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

病理専門医試験を終えて

琉球大学腫瘍病理学講座 青山 肇

私はもともとごく普通の消化器内科として10年ほど臨床ばかりしていました。学位や専門医も取得し、消化器医としての自分の売りを何にしようかと迷っていたころ、以前より人手不足が続いていた大学病院病理部へしばらく応援にいつてみないかと内科の教授からお話があり、病理には以前から興味があったことから喜んでこの話に飛びつきました。どうせやるなら専門医まで目指そうと腫瘍病理学講座の吉見直己教授のもとへ転科することとなりましたが、幸いその後も病理医を目指して当講座へ入局する後輩が毎年続き、専門医補充のためにも कोरोテン式に最短の年数で試験に順番に合格していかなければならないというプレッシャーのもと、今回の専門医試験を迎えました。

なんとかギリギリで合格させていただいた私にとって、成績優秀な方が後輩に向けて模範となる勉強法を伝えるべきこの合格体験記を書くのは大変荷が重いのですが、主に反省点を挙げますので多少でも参考になれば幸いです。

専門医研修要綱には各論として学ぶべき疾患が約1000挙げられており、これまで出題されたのはそのうち7割程度ですから、これを最低限の目標としました。私は「カラーアトラス病理組織の見方と鑑別診断」をサブノート代わりに使用しましたが、写真が大きく鑑別ポイントも簡明に記載してありオススメです。

しかしアトラスだけで覚えた疾患は、ガラスを目の前にするとピンとこないことが多いように思います。九州沖縄支部・若手病理医の会が運用しているティーチングファイルは、それを補う意味でとても有用でした(私は逆にあまりにもわからず、かえって自信喪失しましたが)。ファイルを作成してくださった先生方に篤く御礼申し上げます。またIAPスライドセミナーのバーチャルDVDも役立ちました。

剖検問題対策としては「病理と臨床臨時増刊号・病理解剖マニュアル」の報告書のまとめ方がとても具体的です。また試験官の先生は受験生を救う方向で面接されると聞いていましたがまさにその通りで、試験ではありますが面接自体は楽しく過ごせました。

試験で使われる顕微鏡は弱拡大が4倍までであり普段よりも時間がかかります。5月の「彩の国さいたま病理診断セミナー」は、この時間配分を含めた模擬試験も兼ねたつもりで受けるべきでした。

試験勉強中、そして試験の本番中(!)に痛感したのは、毎日の診断・解剖を一例一例きちんとこなしていくことが結局一番の試験対策である、ということでした。「下読み根性が成長を妨げる」という名言を先輩病理医からいただきました。稀な症例や迷う症例であるからといって曖昧なまま上級医に判断してもらうのではなく、自分でしっかり診断をつけに行くことが真の実力につながるのだ、ということを経験を通じて学びました。今後も、自然に対して謙虚に、患者に対して最善であるように、心を引き締めて診断にあたっていきたいと思います(外科病理学・初版序より)。

とある病理医の試験対策

神戸大学大学院医学研究科病理学講座病理学分野

西尾 真理

ああ、力を出し尽くした。合格した今、その実感を噛みしめています。私の場合、「濃い」剖検例を多く経験する機会に恵まれ、複雑なレポートやチャートを書くこともしばしばで、剖検会にも積極的に参加しており、III型問題への不安はありませんでした。しかし研修時代、手術材料と剖検例に集中するあまり、生検、迅速診断、細胞診の経験がまだまだで、I,II型問題は課題でした。ここ1年以上基礎の研究室におり、大学病院の同期と互いに励ましあいつつも、内心の不安は和らぎませんでした。

本格的な準備開始も今思えば遅かったです。出題傾向を一通りつかもうと、「病理組織の見方と鑑別診断」に付箋を貼って線を引いた2ヶ月前。しかし範囲は満遍なく広く、「やはり私の試験対策はまちがっている」ことを痛感。合格体験記を読んで、「きっと筆者の先生方は極めて成績優秀だったから執筆を依頼されたのであり、凡人の私とは違うのだよ！私とは！」などと無意味に自己正当化を図った1ヶ月前。一念発起して「一疾患1行まとめノート(ページの端を折ると疾患名が隠れる)」を自作するも、診たことのない疾患はキーワードの羅列ばかりでイメージが湧かず、「私のアンチョコがそんなに役立つわけがない」と萎縮してしまった3週間前。詰め込みすぎて思考が停止し、漢字の練習しかできなかった2週間前。この像ならばこの疾患しかないものに絞ってヤマをはった試験前日・・・(これは意外と役立った)。いざ試験が始まれば、III型問題で力を使い果たし、直後のI型問題で痛恨のミスを連発。翌日に挽回するしかなく、半泣きになりながらII型問題に臨みました。しかし、それだけ高いハードルだったからこそ、歯をくいしばって乗り越えることができたのだと思います。

研究室の先生方には、日頃からアドバイスを頂くのみならず、診断業務を減らしていただいたり、実験系を一旦止めることをお許しいただいたり、「彩の国さいたま病理診断セミナー」のテキストを貸して下さったり、気分転換に連れ出していただいたりと、至れり尽くせりの対応をしていただきました。そして何より自分を勇気づけたのが、合格を強くイメージすることでした。タネ明かしになります。勉強に行き詰まったときには、この合格体験記(もどき)を書いて、ひたすら良いイメージをふくらませていました。その甲斐もあり、合格できたことが本当に嬉しいです。専門医の仲間入りを果たさせていただいた今こそが、真の意味でキャリアのスタートというつもりでおります。

今回の反省点もふまえて初心に立ち返り、自己の診断や態度を謙虚に見つめ、専門医として恥ずかしくないよう更なる研鑽をしてゆく所存です。最後になりましたが、試験の運営と、受験する私達のサポートに携わってくださった全ての方々へ深謝いたします。ありがとうございました。

病理専門医試験・合格への道のり

香川大学医学部附属病院病理診断科 渋谷 信介

私は平成19年卒業、病理診断業務に従事して5年目になります。遠回りをして医学部に入学したので、見た目に若さはありません。屋外で周囲の動植物について気をとられ、同定しようとしてしまうのは前職の影響でしょうか。旅行先などで生きものの前でふいに立ち止まり、ためつすがめつしている私の姿に家族は半ばあきれています。

さて、試験対策についてです。当施設の専門医の諸先輩方は口をそろえて「日ごろの診断業務が一番の試験対策」と仰っておられます。また、テスト問題を間違えて困るのは自分だけですが、日常業務でのミスは患者さんの不利益につながります。などと、もっともらしい理屈をこね、長丁場の試験対策が苦手な私は敢えて日常診断業務に重きを置き、ギリギリまで試験勉強らしいものから逃げていました。ということで試験勉強の類は必要最低限しかしていないと思います。幸い、職場には過去問が10年分ほどストックされていました。4月ごろから、ざっと目を通しcommon, uncommonに関わらず良く出題される疾患を中心に、外科病理学、組織病理アトラス、カラーアトラス 病理組織の見方と鑑別診断、病理医・臨床医のための病理診断アトラス(Vol. 1-3)などの定番書籍を見直しました。また職場にある定型症例のプレパラートセットも見直しました。I型およびII型の問題についてはこれでなんとかなったように思います。解剖に関しては試験の直前まで自身の執刀症例でフローチャート作成および診断・考察をしておりました。実際のIII型問題は文字と写真情報、数枚のプレパラートのみで診断・考察をまとめるスタイルであり、やはり難しく感じました。実務では依頼科の医師との議論を通じて、病態についての誤解を最小にできますので。

有難いことに私は先達に恵まれました。学生時代には、香川大学医学部炎症病理学教室の阪本晴彦先生および上野正樹先生に授業のみならず課外でも病理解剖・病理診断を指導していただきました。初期臨床研修時には、市立豊中病院病理診断科の花田正人先生および足立史朗先生にご指導いただきました。また、現在の職場では、羽場礼次先生をはじめ、串田吉生先生および香月奈穂美先生など沢山の方々のご指導で、病理医としての基本骨格をつくっていただいた様に思います。ひとまず専門医試験には合格しましたが、私が診断病理医として十分な働きができるか否かがこれからの課題です。後々、「Your success is my success.」、「やつは指導しがいがあったなあ。」と仰っていただけるように精進したいと思います。

==私の趣味=====

漫画と熱帯魚に囲まれた生活

香川大学医学部附属病院病理診断科 石川 亮

私は2013年9月現在、医者になって3年目、病理を始めて約1年です。まだまだ病理の世界に足を踏み入れたばかりの若輩者ですので、趣味に費やす時間はほとんどなく日々病理診断に関する勉強に追われている毎日です。また、昨年娘が生

まれたこともあり、家庭では妻と共に育児に悪戦苦闘しています(実際に悪戦苦闘しているのはほぼ妻ですが…)

そんな中、空いた時間で続いている趣味が2つあります。

一つ目は漫画です。漫画にはまり始めたのは高校生の時なので、漫画を趣味にしてかれこれ10年になります。勉強している同級生を尻目に、毎日のように通学路途中の古本屋に寄っては、漫画を買いあさっていました。今では約5000冊の漫画が実家の押入れで眠っています。中でも気に入っている漫画をいくつか紹介したいと思います。あだち充の野球漫画「タッチ」「H2」。登場人物の顔がほぼ同じですが、サクサク進む話の展開は気に入っています。少し古いですが「虹色とうがらし」もあだち充の隠れた名作だと勝手に思っています。高田裕三の「3×3EYES」、藤田和日郎の「うしおととら」、「からくりサーカス」なども高校時代によく読んでいました。幸村誠の「プラネテス」という宇宙飛行士の話はNHKでアニメ化されましたが、少し考えさせられる良い漫画です。宮崎駿の「風の谷のナウシカ」はアニメで有名ですが、原作はもっと長い話という事をご存じですか？原作・原案李學仁、漫画王欣太の「蒼天航路」も大学時代に何度も読みました。三国志の話なのですが、劉備玄德が主人公の話が多い中、曹操が主人公も漫画で、残虐ながら理を求める曹操の姿が描かれています。尾田栄一郎の「ONE PIECE」は今や大人気漫画ですが、始まった当初から買い集めています。単純明快な海賊の物語ですが、話の中に細かな伏線がいくつもあって、色々な所で話が繋がっていくのが面白いと思います。そしてなんといっても井上雄彦の「スラムダンク」「バガボンド」「リアル」。どれも登場人物が個性豊かで人間味が、また絵も芸術的だと思います。それぞれバスケ、宮本武蔵、車椅子バスケの話ですがぜひ皆さんにも読んで頂きたい漫画です。

漫画の事を語り始めるとまだまだ続きそうなのでそろそろ二つ目の趣味、熱帯魚に話を移したいと思います。今となっては何がきっかけで飼いだめたのか分かりませんが、大学時代から熱帯魚の飼育を始めました。ネオンテトラ、グッピー、コリドラスといった種をメインにかれこれ6年ほど色々な熱帯魚を飼育しました。4匹から飼いだめたグッピーが繁殖しすぎて一時60匹近くまで増加し、1個だった水槽が2個に増えたり。夜中にヒーターが故障し水温が急上昇したため、朝起きたときには飼っていた熱帯魚が全滅したりと色々なことがありました。今はテトラを主体に数種類の熱帯魚を飼育しています。1歳になる娘も時々眺めてくれています。いつか娘と一緒に熱帯魚を飼育できる日を夢見ながら、毎日熱帯魚達に癒されています。

病理の勉強に励みながら、この2つの趣味をのんびり続けられたらと思っています。

== 支部報告 =====

一北海道支部

北海道支部編集委員 深澤 雄一郎

学術活動報告

第160回日本病理学会北海道支部学術集会(標本交展会)が外丸詩野先生(北海道大学大学院医学研究科分子病理)

のお世話で7月20日(土)、北海道大学医学部学友会館フラテ大研修室において行われました。検討された症例は以下の通りです。

- 13-06/診断に苦慮した胃腫瘍の一例/桑原健¹、畑中佳奈子¹、牧田啓史¹、スフィ・ノルハニ¹、藤田裕美¹、高桑恵美¹、石川隆壽²、大森沙織³、安本篤志⁴、三橋智子¹、松野吉宏¹(¹北海道大学病院病理部、²同消化器外科I、³消化器内科、⁴血液内科)/50歳代 男性/Anaplastic large cell lymphoma, ALK negative.
- 13-07/高度貧血を伴った小腸腫瘍の1例/西川祐司¹、山本雅大¹、佐藤啓介²、桜井宏治²、旭川医科大学病理学講座腫瘍病理分野、²JA北海道厚生連旭川厚生病院病理部/60歳代 女性/Angioleiomyoma (vascular leiomyoma) of the small intestine associated with intestinal bleeding and intussusception. /グロムス腫瘍等が鑑別に挙がるとの意見があり、追加検討することとなった。
- 13-08/左大腿軟部腫瘍の一例/杉田真太郎¹、計良淑子¹、荻野次郎¹、中西勝也¹、加谷光規²、長谷川匡¹(¹札幌医科大学附属病院病理部、²札幌医科大学附属病院整形外科)/70歳代 女性/Angiofibroma of soft tissue
- 13-09/陳旧性膿胸に発生した胸壁腫瘍の一例/伊藤真理子、松田玲奈、八代真一、村上洋平、鹿野哲、佐々木豊(勤医協中央病院病理科)/80歳代 男性/Malignant lymphoma, peripheral T-cell lymphoma, not otherwise specified (pyothorax-associated lymphoma).
- 13-10/臨床的に卵巣癌が疑われた骨盤内巨大腫瘍の1例/池田 仁(函館中央病院病理診断科)、木村 敬子(同産婦人科)/50歳代 女性/Adult neuroblastoma, poorly differentiated.
- 13-11/少し変わった子宮内膜腫瘍/立野正敏(釧路日赤病院病理診断科)、米原利栄(同産婦人科)、青木直子(旭川医科大学病理学講座)、柳内 充(市立札幌病院病理)/60歳代 女性/Endometrioid adenocarcinoma, G3. - Signet-ring cell carcinoma. - Intramural carcinoma of the uterus.

第161回日本病理学会北海道支部学術集会(標本交見会)が外丸詩野先生(北海道大学大学院医学研究科分子病理)のお世話で9月7日(土)、北海道大学医学部学友会館フラテ大研修室において行われました。検討された症例は以下の通りです。

- 13-12/少し変わった子宮内膜病変/立野正敏(釧路日赤病院病理診断科)、米原利栄(同産婦人科)、青木直子(旭川医科大学病理学講座)、柳内 充(市立札幌病院病理)/50歳代 女性/Atypical endometrial hyperplasia.
- 13-13/40代女性の大腿に発生した稀な腫瘍の1例/武田広子、鈴木宏明、山城勝重(北海道がんセンター 病理診断科)/40歳代 女性/NUT midline carcinoma.
- 13-14/歩行障害をきたした脊髄神経根原発腫瘍の一例/石田雄介^{1,3}、加藤容崇¹、木村太一¹、谷野美智枝¹、西原広史^{1,2,3}、田中伸哉^{1,2}、山内朋裕⁴、小柳泉⁴(北海道大学大学院医学研究科腫瘍病理学¹、同探索病理学²、北海道大学病院高度先進医療支援センター³、北海道脳神経外科記念病院⁴)/60歳代 女性/Solitary fibrous tumor.
- 13-15/鑑別に苦慮する卵巣腫瘍の一例/石井保志、伊丹弘恵、柳内充、辻隆裕、深澤雄一郎(市立札幌病院 病理診断科)/40歳代 女性/Mucinous adenocarcinoma, expansile-type.
- 13-16/高齢女性の卵巣腫瘍の一例/岩崎沙理¹、直 亨則¹、藤澤孝志¹、吉井一樹²、酒井慶一郎²、鈴木昭¹(KKR札幌医療センター 病理診断科I 産婦人科2)/70歳代 女性/Adult neuroblastoma. /会場からPNET (central type) arising in teratoma が鑑別診断として挙げられ追加検討することになった。
- 13-17/臨床的に卵巣腫瘍が疑われた骨盤内腫瘍の1例/池田 仁、木村 敬子(函館中央病院病理診断科・産婦人科)/60歳代 女性/Wolffian adnexal tumor (female adnexal tumor of probable Wolffian origin).

—東北支部—

東北支部編集員 増田 友之

第77回東北支部学術集会および幹事会・総会

標記集会が平成25年7月27日に新潟市有任記念館1F小会議室で開催され、下記の事項が報告・協議された。

報告事項:

1. 第77回支部学術集会の概要について本間集会長より説明があった。
2. 理事会からの報告について、資料にもとづいて八木橋支部長より話がなされた。要点としては、理事の任期が変わり8月位に決定すること、会員数が増加傾向であること、名誉会員が多すぎるとの意見があり、功労会員制度を検討中であること、専門医制度の変更があるとのことであった。広報委員会よりuminIDを使用してほしいとの意見があり、すでに配信されているので、持っていない方は本部に問い合わせ取得してほしいとのこと。
3. 支部の今後の運営、企画への取り組み等について、八木橋支部長より話がなされた。
4. 総務報告では、渡辺担当幹事代理として八木橋支部長より資料を基に会員情報の取り扱いについて説明がなされ、資料の如く運用するという事で承認された。協議事項の24年度決算・25年度予算についても、資料を基に説明がなされ、承認が得られた。
5. 学術委員会報告では、山川担当幹事代理として刑部光正先生より、支部学術委員連絡会議事録の資料に基づいてお話があった。また、支部長よりシニアの先生方へ再教育の必要性についての発言があった。

6. 業務・広報委員会報告で、増田担当幹事代理として佐藤孝先生より資料をもとに報告があった。まず、専門医部会会報編集委員会議事録より、「年4回の企画の・特集の話(7月号:病理医と育児、10月号:専門医合格者へ依頼、1月号:一人病理医の現状、4月号:病理医と学位)」、「専門医部会会報掲載内容のデータファイル化」、について説明があった。次に、「診断病理」編集委員会議事録より、「査読についてのルール化」、「電子投稿について笹氣出版と交渉中である」、「採択率を厳しくする方向である」「男女共同参画委員会での配布物も添付したので見てほしい」との説明があった。それを受けて八木橋支部長より「診断病理の東北地方からの投稿がやはり少ないので、各県先生方に頑張ってほしい。男女共同参画も支援がそのうちなくなるので、その後どうなるかが問題だ」とのお話があった。

7. その他として、八木橋支部長が夏の学校の周期について先生方に伺った。多々ご意見を頂き、来年二月の役員会で最終的な意見をまとめることにするとお話があった。

協議事項:

1. 第78回支部学術集会について八木橋支部長より日程等の説明(2014年2月15, 16日長陵会館にて)があった。
2. 第79回支部学術集会について、八木橋支部長より武田泰典先生が次期集会長で、今日は代理で佐藤泰生先生にご出席いただいた旨お話があった。日程は7月19, 20日を予定しているとのことである。

――関東支部――

第60回 日本病理学会関東支部学術集会報告

茨城県立中央病院・茨城県地域がんセンター病理診断科

飯嶋 達生

平成25年9月21日(土曜日)、茨城県つくば市(つくば国際会議場)において、第60回日本病理学会関東支部学術集会と第36回茨城県病院病理医の会が共催されました。スタッフを除き94名の先生方に参加いただきました。

今回の学術集会は特別講演を行わず、一般演題15題で構成いたしました。さまざまな臓器・疾患の興味深い症例が発表され、フロアからも多くの先生方よりご意見をいただき、活発な討論・考察が行われました。また今回はバーチャルスライドを用いて、発表症例の組織標本を事前閲覧していただきましたので、その分、参加いただいた先生方の中で深く討論いただけたものと思います。今回、特別講演はありませんでしたが、参加していただいた先生方々には有意義な時間を過ごしていただけたものと思っております。

当日のプログラムは以下の通りでした。

セッション1

座長 大橋健一 (横浜市立大学医学部医学科様態病理学)

- 膀胱表在癌に対するBCG膀胱内注入療法後に発生した膀胱前腫瘍
沼倉里枝, 森川鉄平, 牛久哲男, 深山正久(東京大学医学部 人体病理学・病理診断学)
- 広範に肺胞壁に沿って発育進展する肺扁平上皮癌の1例
今田浩生¹⁾, 仁木利郎²⁾, 佐久間裕司²⁾, 吉本多一郎²⁾, 坂谷貴司¹⁾, 福嶋敬宜¹⁾
(¹⁾自治医科大学附属病院病理診断部, ²⁾自治医科大学病理学講座統合病理学部門)
- 臨床的に癌との鑑別が困難だったIgG4「非」関連の膵炎の一例
大谷明夫(国立病院機構水戸医療センター 病理診断科)

セッション2

座長 澁谷 誠 (東京医科大学八王子医療センター中央検査部)

- 多形性に富む大型細胞で構成され高い増殖活性を示す成人大脳嚢胞性腫瘍の1例
大出貴士¹⁾, 岩本雅美¹⁾, 太田 聡²⁾, 本島卓幸³⁾, 廣野誠一郎³⁾, 岩立康男³⁾, 中谷行雄¹⁾ (¹⁾千葉大学大学院医学研究院診断病理学, ²⁾千葉大学医学部附属病院病理部, ³⁾千葉大学大学院医学研究院脳神経外科学)
- 61歳男性に発生した下垂体部紡錘形腫瘍の一例
市村隆也¹⁾, 佐々木惇¹⁾, 清水道生²⁾ (¹⁾埼玉医科大学病理学, ²⁾埼玉医科大学国際医療センター病理診断科)
- マイコプラズマ感染症に中枢及び末梢神経障害を合併した一例
臺勇一¹⁾, 白岩伸子²⁾, 田岡謙一³⁾, 佐藤祐二³⁾ (¹⁾筑波記念病院病理科, ²⁾同神経内科, ³⁾同血液内科)

セッション3

座長 大谷明夫 (国立病院機構水戸医療センター 病理診断科)

- 肝間葉性過誤腫の1切除例
井上朋大, 中澤匡男, 河西一成, 大石直輝, 望月邦夫, 近藤哲夫, 加藤良平 (山梨大学医学部附属病院 病理診断科)
- 膵体尾部のMixed acinar-neuroendocrine-ductal carcinomaの一例
松田陽子¹⁾, 石渡俊行¹⁾, 吉村久志¹⁾, 松下晃²⁾, 住吉宏樹²⁾, 中村慶春²⁾, 石井英昭³⁾, 内田英二²⁾, 大橋隆治³⁾, 内藤善哉¹⁾ (¹⁾日本医科大学病理学統御機構・腫瘍学, ²⁾日本医科大学消化器外科学, ³⁾日本医科大学付属病院病理部)

セッション4

座長 仁木利郎 (自治医科大学病理学講座)

- 濾胞性リンパ腫との鑑別が困難な節性辺縁帯リンパ腫の一例
宮岡雅, 富田さくら, 菊地智樹, 中村直哉 (東海大学医学部基盤診療学系病理診断学)
- 子宮腺筋症から発生したと思われる腺癌の1例
九島巴樹¹⁾, 宮本真豪²⁾, 清水華子²⁾ (¹⁾昭和大学病院・臨床病理診断科, ²⁾昭和大学病院・産婦人科)

11 稀な上咽頭腫瘍の1例

大石直輝, 近藤哲夫, 中澤匡男, 望月邦夫, 井上朋大, 河西一成, 川崎朋範, 加藤良平 (山梨大学医学部人体病理学講座)

セッション5

座長 森下由紀雄(東京医科大学茨城医療センター中央診療部門病理診断部)

- 乳腺pseudoangiomatous stromal hyperplasiaの1例
桂田由佳¹⁾, 宮居弘輔¹⁾, 山岸周二²⁾, 守屋智之²⁾, 山崎民大²⁾, 岩屋啓一¹⁾, 津田均¹⁾ (¹⁾防衛医科大学校病態病理学講座, ²⁾防衛医科大学校乳腺外科)
- 左上腕部皮下から発生した悪性腫瘍
河西一成, 望月邦夫, 近藤哲夫, 中澤匡男, 大石直輝, 井上朋大, 加藤良平 (山梨大学医学部附属病院病理診断科)
- 増殖性毛包性嚢胞腫瘍の一例
近藤謙 (国立病院機構 霞ヶ浦医療センター 研究検査科)
- 肺腫瘍の症例
菅野雅人¹⁾²⁾, 河合瞳¹⁾²⁾, 矢野陽子¹⁾, 中野雅之¹⁾, 糸口直江¹⁾²⁾, 佐藤森樹¹⁾²⁾, 坂田晃子¹⁾²⁾, 里見介史¹⁾²⁾, 南優子¹⁾²⁾, 山川光徳³⁾, 野口雅之¹⁾²⁾ (¹⁾筑波大学診断病理学研究室, ²⁾つくばH組織診断センター (THDC), ³⁾山形大学医学部病理診断学講座)

第91回山梨ぶどうの会

平成25年6月10日 参加者9名

於: 山梨大学医学部基礎研究棟3F人体病理集會室

番号 部位 年齢・性別 病理診断 出題者

- 533 軟部組織 (右大腿) 60歳代男 Malignant peripheral nerve sheath tumor with heterologous element of bone and cartilage
河西一成 (山梨大学・人体病理)
- 534 口蓋 40歳代男 Mucoepidermoid carcinoma, low-grade
中澤 匡男 (山梨大学・人体病理)
- 535 鼻腔 60歳代男 Mucoepidermoid carcinoma, low-grade
中澤 匡男 (山梨大学・人体病理)
- 536 肝臓・脾臓・骨髄 40歳代男 Splenohepatic T cell lymphoma or EBV-associated T/NK lymphoproliferative disorder
井上 朋大 (山梨大学・人体病理)
- 537 膵臓 80歳代女 Neuroendocrine tumor 井上 朋大 (山梨大学・人体病理)
- 538 鼻腔 70歳代男 Solitary fibrous tumor 井上 朋大 (山梨大学・人体病理)

――中部支部――

中部支部編集委員 森谷 鈴子

第71回日本病理学会中部支部交見会

日時: 2013年7月13日、14日

会場: 福井県立病院

世話人: 海崎泰治先生

参加者: 143名

<症例検討>

- 1249 富山大学病理診断学講座 中嶋隆彦 70代女性 卵巣 Carcinosarcoma.
高カルシウム血症を来しており、腫瘍内の clear cell adenocarcinomaの成分にPTH-rp産生が確認された。背景のendometriosisと癌発生との関係についても興味を持った。
- 1250 聖隷浜松病院 新井義文 50代女性 卵巣 Endometrioid adenocarcinoma resembling sex-cord stromal tumor (sertoriform variant).
性索間質細胞系腫瘍やカルチノイドを思わせる特異な組織像が大部分を占めたが、背景に内膜症があり、endometrioid adenocarcinomaを疑う手掛かりの一つと考えられた。
- 1251 焼津市立総合病院 久力権 44歳女性 子宮 Endometrial stromal sarcoma(ESS), low-grade and tuberous sclerosis complex (TSC)-related perivascular epithelioid cell tumor (PEComa).
結節性硬化症患者の子宮に病理所見の異なる2つの腫瘍が発生。PEComaと考えられた病変(HMB-45陽性)は ESSに類似した増殖パターンを示し、MelanAが陰性でneuromelaninが全く認められなかったことから脱分化してCD10が陰性になったESSとの異同が問題となった。

- 1252 金沢医科大学臨床病理学 黒瀬望 60代前半女性 硬膜
Rosai-Dorfman disease.
画像所見、病理所見共に meningioma(特に lymphoplasmacyte-rich meningioma)との鑑別が難しいことが示された。
- 1253 静岡県立静岡がんセンター病理診断科 草深公秀 74歳男性 左鼻腔
Sinonasal undifferentiated carcinoma.
咽頭癌の既往歴のある患者に発生した鼻腔内腫瘍。扁平上皮への分化が一部にあり、会場では未分化な成分を伴った扁平上皮癌とする意見が多かった。
- 1254 磐田市立総合病院病理診断科 鈴木潮人 18歳女性 副鼻腔
NUT midline carcinoma.
FISHでmonotonousに fusion geneが見られた。大腿部軟部など必ずしも midlineとは限らない症例もあるとのコメントがあった。
- 1255 黒部市民病院 高川清 55歳男性 皮膚
G-CSF producing sebaceous carcinoma of the skin.
会場からは、sebaceous carcinomaの特徴が乏しく、頭頭部の squamous cell carcinomaの転移なども鑑別に挙がるとの意見が出た。
- 1256 富山県立中央病院 内山明央 60代男性 甲状腺外結節
Carcinoma showing thymus-like differentiation (CASTLE) of the neck (poorly differentiated squamous cell carcinoma).
甲状腺乳頭癌で摘出された頸部リンパ節標本に偶然認められた病変で、異所性胸腺からの発生が考えられた。
- 1257 三重大学附属病院病理部(現在松坂中央病院臨床病理科) 杉本寛子 74歳男性 耳下腺
Myoepithelial carcinoma ex pleomorphic adenoma, invasive type.
腺腔様に見える成分の解釈が微妙で、偽腺管ととらえるか腺癌成分ととらえるか、観察者によって意見が分かれる可能性があるとのコメントがあった。
- 1258 愛知県がんセンター中央病院遺伝子病理診断部 新田壮平 52歳女性 肺
Papilloma (solitary ciliated glandular papilloma or ciliated muconodular papillary tumor).
病変には形態的 spectrumがあるが、基本的には良性で、切除しないと確定診断ができないが、切除すればそれで完治する病変であると説明された。
- 1259 藤田保健衛生大学病院 中川満 30代女性 肺・胸膜・横隔膜
Calcifying fibrous tumor.
稀な典型例。1993年に初めて報告された比較的新しい概念で、代表的な文献が紹介された。
- 1260 鈴鹿中央総合病院 村田哲也 80代半ば女性 腹腔内腫瘍
Liposarcoma, dedifferentiated type.
いわゆる low-gradeの脱分化に相当する。1年半前の画像では何もなかったが、4kgの巨大な腫瘍になるという急激な増大を見せたのが印象的であった。
- 1261 信州大学医学部附属病院臨床検査部 小平日実子 70代男性 右大腿軟部
Low-grade fibromyxoid sarcoma.
形態的に悪性に見えない異型に乏しい紡錘形細胞腫瘍を見た時、鑑別に挙げるべき腫瘍で、MUC4免疫染色が有用であることが示された。
- 1262 岐阜市民病院 山田鉄也 50代女性 胃
Plasmablastic lymphoma of the stomach in a HIV-negative patient.
免疫染色のパターンは報告例と少し異なる点があり、ALK-positive anaplastic diffuse large B-cell lymphomaとの鑑別が必要との意見も出た。
- 1263 石川県立中央病院 津山翔 70歳男性 十二指腸
Tubular adenoma, gastric type (so-called pyloric gland adenoma)
種々の免疫染色から、一部に胃底腺への分化もあると考えられた。
- 1264 金沢医療センター 川島篤弘 60代女性 上行結腸
Inflammatory myofibroblastic tumor.
通常の場合よりも aggressive な経過を取った。投票ではGIST, MFHとの意見が多かった。
- 1265 名古屋第一赤十字病院病理部 倉重真沙子 30代女性 直腸
Synovial sarcoma.
肺に転移し、肺病変のFISHによって fusion geneが確認された。
- 1266 名古屋大学医学部附属病院 佐藤啓 12歳女性 肝臓
Fibrolamellar hepatocellular carcinoma.
稀な典型例。Cytokeratin7, CD68が診断に有用であることが示された。日本人の症例でここまで典型的な所見を見る事は珍しいとのコメントがあった。
- 1267 小牧市民病院 桑原恭子 70代後半女性 腎臓
Adenocarcinoma of the pelvis, non-intestinal type.
難解な組織像で、腎盂内の上皮内病変の存在が診断の手掛かりとなった。

- 腎周囲脂肪組織浸潤の評価の仕方についても専門家からコメントがあった。
- 1268 福井大学医学部附属病院 大越忠和 60代男性 精巣
Extranodal NK/T-cell lymphoma, nasal type.
一見 diffuse large B-cell lymphomaを思わせるような形態で普通のNK/T-cell lymphomaのHE所見と異なっていた。鼻腔以外の病変ではそのように見えることが多く、臨床的な違いがあるか否かについて現在検討中であるとのコメントがあった。
- 1269 市立砺波総合病院 杉口俊 59歳男性 リンパ節
(初発時)Antioimmunoblastic T-cell lymphoma with hyperplastic follicles.
(再発時)Diffuse large B-cell lymphoma+angioimmunoblastic T-cell lymphoma.
再発時にT-cell, B-cellの双方に遺伝子再構成が確認された。再発時の所見で angioimmunoblastic T-cell lymphomaの混在を指摘するのは難しいと考えられたが、背景に好酸球が多く見られたことが T-cell lymphomaの混在を疑う一つのきっかけとなった。
- 1270 金沢大学医学系研究科分子細胞病理 田尻亮輔 ①65歳男性、②62歳女性 リンパ節
① Iatrogenic (TNF α -inhibitor) immunodeficiency-associated lymphoproliferative disease.
② Classical Hodgkin lymphoma, mixed cellularity.
どちらの症例もリウマチにてメソトレキセートを投与されており、広義のiatrogenic LPDに入る。①では治療中止による縮小傾向を見せたが再増大、②では経過中に classical Hodgkin lymphomaの形態で再発し、どちらも化学療法を要した。
- 1271 福井県立病院 山口真希 61歳男性 大動脈
Intimal sarcoma.
当初、臨床的に高安病と診断されていた。両側副腎に転移していた。大動脈は一見腫瘍と思えない硝子化の目立つcellularityの低い病変であったが、比較的典型例であることが示された。
- イブニングセミナー(ノバルティスファーマ株式会社共催)
座長: 福井県立病院臨床病理科 海崎泰治先生
演者: 兵庫医科大学病院病理 廣田誠一先生
「GIST診療ガイドライン改訂の方向性」

第16回スライドセミナー(2013年3月23日 富山県立中央病院)
優秀演題受賞式
磐田市立総合病院 谷岡書彦先生
Progressive lymphadenopathy related with Gaucher disease.

第71回中部支部交際会学術奨励賞は下記の先生方が受賞されました。
学術奨励賞カテゴリーA(対象: 専門医試験合格前)
名古屋第一赤十字病院 倉重真沙子先生
福井県立病院 山口真希先生
愛知県がんセンター中央病院 新田莊平先生
藤田保健衛生大学病院 中川満先生
信州大学医学部附属病院 小平日実子先生
学術奨励賞カテゴリーB(対象: 専門医試験合格3年以内)
市立砺波総合病院 杉口俊先生
学術奨励優秀発表賞
磐田市立総合病院 鈴木潮人先生
金沢医科大学 黒瀬望先生

第7回日本病理学会中部支部夏の学校
平成25年8月17日(土), 18日(日)
両日、浜名湖畔にある日本商工会議所カリヤックにおいて、日本病理学会中部支部主宰第7回夏の学校 in 静岡(浜松医科大学主管)が開催されました。参加者は総計76名で、学部

学生が17名、研修医が11名でした。8名の先生に講師をしていただき、感謝しております。講演後、立食パーティーや情報交換会を通じて、学生や研修医と交流を深めることができ、大変有意義な会であったと思います。

次回学術集会

第72回日本病理学会中部支部交歓会

日時:平成25年12月21日(土)

場所:名古屋市立大学

世話人:山下依子先生(名古屋市立大学病理部)

近畿支部

近畿支部編集委員 伊東 恭子

近畿支部の最近の活動および今後の活動予定をお知らせいたします。

I-1. 平成25年度 夏期病理診断セミナー(愛称:夏の学校)が下記の内容で開催されました。

日時:2013年8月10日(土)・11日(日)

場所:神戸大学医学部(研究棟C地下1階第2実習室)

テーマ: Her2病理診断のすべて

8月10日(土) 13時～18時30分

1. 「基礎と臨床」
三好 康雄 先生(兵庫医科大学 乳腺内分泌外科)
2. 「免疫染色 基礎から実践まで」
澁木 康雄 先生(国立がん研究センター中央病院 病理・臨床検査科)
3. 「FISHとDISH 基礎から実践まで」
津田 均 先生(防衛医科大学校 病理病態学)
4. 「乳腺」
津田 均 先生(防衛医科大学校 病理病態学)
5. 「胃」
九嶋 亮治 先生(国立がん研究センター中央病院 病理・臨床検査科)

8月11日(日) 9時～12時

1. 「Her2 病理診断実習(1)乳腺」
津田 均 先生(防衛医科大学校 病理病態学)
2. 「Her2 病理診断実習(2)胃」
九嶋 亮治 先生(国立がん研究センター中央病院 病理科)

日本病理学会近畿支部 平成25年度 夏期病理診断セミナーホームページをご覧ください。

<http://jspk.umin.jp/H24-/summer-seminar/summer-seminar2013.html>

I-2. 第62回日本病理学会近畿支部学術集会が下記の内容で開催されました。

日時:平成25年9月28日(土)

場所:関西医科大学(枚方)

世話人:螺良愛郎 先生(関西医科大学)

テーマ:骨・軟部腫瘍

モデレーター:小西英一 先生(京都府立医科大学)

以下にプログラムを掲載いたします。(なお、検討症例、画像等につきましては、

<http://jspk.umin.jp/H24-/gakujuutushu-kai/57th/program%2057th.html> で閲覧可能です。) なお、今回も託児所を開設いたしました(sakaida@hirakata.kmu.ac.jp)。

座長:伊東恭子 先生(京都府立医科大学)

829 胃壁腫瘍の一例 梶本和義 先生,他(兵庫県立がんセンター病理診断科)

830 憩室炎の1例 松岡亮介 先生,他(神戸市立医療センター中央市民病院 臨床病理科,他)

座長:富田裕彦 先生(大阪府立成人病センター)

831 多彩な全身症状と血小板減少を呈した一例 石井真美 先生,他(大阪市立総合医療センター病理部)

832 新生児肋骨腫瘍の1例 筑後孝章 先生,他(近畿大学医学部病理学教室,他)

833 顎下部にみられた「原発不明癌」の再検討 原田博史 先生(生長会病理センター 府中病院 病理診断科)

座長:螺良愛郎 先生(関西医科大学)

特別講演1『新 WHO 分類の解説』

中嶋安彬 先生(PCL 大阪病理細胞診センター)

座長:小西英一 先生(京都府立医科大学)

特別講演2 『骨軟部腫瘍の免疫染色 — 症例を中心に』

吉田朗彦 先生(国立がん研究センター中央病院病理科)

座長:小西英一 先生(京都府立医科大学)

岩佐葉子 先生(和泉市立病院)

<教育講演>

1. 血管腫の病理
多田豊曠 先生(豊川市民病院 臨床検査科)
2. cellular angiofibroma とその類縁疾患
岩佐葉子 先生(和泉市立病院病理科)
3. 通常型軟骨肉腫の組織学的所見の解析
小西英一 先生(京都府立医科大学病院病理部・病理診断科)
4. 病理医が知っているに役に立つ骨軟部腫瘍の放射線画像所見
藤本良太 先生(京都市立病院 放射線診断科)

II. 今後の学術集会の予定です。

II-1 第63回日本病理学会近畿支部学術集会

日時:平成25年12月7日(土) 場所:京都府立医科大学

世話人:伊藤彰彦 先生(近畿大学)

テーマ:胆道・膵臓

モデレーター:柳澤昭夫 先生(京都府立医科大学)

II-2 第64回日本病理学会近畿支部学術集会

日時:平成26年2月8日(土) 場所:大阪大学

世話人:森井英一 先生(大阪大学)

テーマ:顎・口腔疾患(唾液腺を除く)

モデレーター:豊澤 悟 先生(大阪大学)

中国四国支部

中国・四国支部編集委員 串田 吉生

A. 開催報告

1. 「第14 回病理学夏の学校」開催報告

第14 回病理学夏の学校 世話人 林 一彦

鳥取大学 医学部 分子病理学

この度の病理学夏の学校は鳥取県米子市の皆生グランドホテル天水を会場として、平成25年8月18日(日)～19日(月)の2日間の日程で開催致しました。今回は中国四国地区の大学に加えて、広島大学の安井教授のお取り計らいにより、奈良県立医科大学から6名の学生、ならびに分子病理学講座の國安弘基教授にご参加を頂きました。参加者は教員・病理医と併せて総勢120名となり、前回・前々回に引き続き過去最大人数を更新しました。お暑い中遠方よりご参加下さいました学生さん、教員・病院病理医の先生の皆様に、心より御礼申し上げます。また多数の先生方より有難い差入れを頂きましたこと、併せて深謝申し上げます。

今回の課題はCPC形式による剖検症例の検討に加えて、自己紹介発表として各県の名所・名物を紹介して頂くというもの

に致しました。発表は総じて非常にレベルが高く、自己紹介では動画や音声を交えた極めて印象的なプレゼンテーションをされる大学もあり、学生の皆さんの技倆が遺憾なく発揮されていたと感じました。また症例検討はアンケート結果にもある通り、やや難しめの症例であったと思いますが、どの大学もそれを乗り越えて、非常に詳細かつ論理的な発表をされていました。学生の皆さんには勿論のこと、指導に当たって頂いた先生方にも篤く感謝を申し上げる次第です。

特別講演としましては、藤田保健衛生大学の堤寛教授より「患者さんに顔のみえる病理医からのメッセージ」というタイトルでお話を頂きました。多くの悩みや葛藤を抱えた大勢の患者さんに対して、病理医という立場で直接接して来られたご経験をはじめ、他の人がやっていないことに挑戦することで、様々な新発見や、組織(学会)の改革を成し遂げられてきたことなど、数多くの話題をご披露頂きました。時間の都合により途中で中断をお願いしてしまった点は非常に申し訳なく存じますが、大変刺激のあるお話を拝聴することができました。

また、特別講演の他に「若手病理医の現況」という題目で鳥取大学器官病理学の野坂加苗先生、香川労災病院の守都敏晃先生にお話を頂き、愛娘を抱えての女性病理医の日々の生活や、臨床医と密接なコミュニケーションを取りつつ診療に当たっている臨床病理医の日常を披露して頂きました。両人のお話は、参加学生の職業選択において重要な示唆を与えたのではないかと思います。さらに、2日目には高知赤十字病院の黒田直人先生より「皆が楽しく働くための職場環境構築の工夫～病院病理医の奮戦記～」との題目で、病理診断科における上司と部下の円滑なコミュニケーションの秘訣について学術的な論点からお話を頂き、会場は大きな笑いに包まれました。

今回は堤先生の監修のもと、「検体の所有権」というテーマでグループワークも行いました。ディスカッションの時間が非常に短く、十分な議論ができなかったかと思いますが、2日目の発表では予想以上に完成度の高い議論の成果を披露して頂き、我々教員も大いに勉強になりました。ただ、アンケートでも特にグループワークについて、討論時間の短さなどについてのお叱りが多く、今後の課題になるかと考えています。

病理学夏の学校のもう一つの大きな目的として、他大学の学生との交流や教員、病理医との親睦を深めるということが挙げられます。今回は夕食(意見交換会)に続いて、皆生温泉旅館組合による打上げ花火や手持ち花火、そして2次会3次会と、多くの学生・教員の皆様にご参加頂き大いに盛り上がりました。特に2次会では日本病理医フィルの堤先生ならびに愛媛大学の宮崎先生、川崎医科大学の藤原先生に、大学院生や学生さんを交えたアンサンブルを披露頂き、多様なジャンルの音楽に会場はしばし酔いしれました。

会の最後には教官アンケートにより優秀発表を行った大学・グループへの表彰が行われ、最優秀発表賞に広島大学、準優秀発表賞に愛媛大学、優秀自己紹介発表賞に川崎医科大学、グループワーク優秀賞にはAグループがそれぞれ選ばれました。さらに、特別参加賞として奈良医科大学、Most

impressive studentとして広島大学の石川君に賞を授与させて頂きました。副賞は教室内で試食会などを行って選んだものですので、満足してご賞味頂けるものと考えております。

なお今回の会では広島大学の安井教授より、今後の病理学夏の学校の企画運営について、過去に学生として参加したOB・OGが主体となって行うというのはいかがでしょうか、との提言がなされました。本会にはリピーター学生の方も多く、学生目線でのアイデアや要望・改善点などは多々あると思われます。一朝一夕には行かないかも知れませんが、今後の検討課題として、当番校の先生方に一考して頂きたいと存じます。

アンケートでは回答頂いた参加学生のうち、13%が「将来是非病理を専攻したい」と考え、29%が「数年くらいは病理をしてみたい」と考えているという結果が得られました。病理医不足が叫ばれて久しい昨今ですが、病理に対して潜在的な関心を持っている学生は少なくないものと思われます。病理学夏の学校の運営・継続にはなかなか苦勞が伴いますが、今回はこのような活動を通じて、将来の医療を担う若手病理医の育成・教育を行っていくことの重要性を認識する、貴重な機会となりました。

最後に、今回利用させて頂いた皆生グランドホテル天水のスタッフの皆様、バーチャルスライドのサーバ管理を快く請け負って頂いた鳥取大学医学部附属病院がんセンターのスタッフの皆様ならびに前センター長 紀川純三先生、円滑な会の進行にご協力頂きました座長の先生方、そしてこの会にご参加頂き、大いに盛り上げてくださった皆様に、この場を借りまして心より御礼を申し上げます。

B. 開催予定

1. 第112回学術集会

開催日:平成25年12月7日(土)

世話人:岡山赤十字病院 大原信哉先生

C. 県単位の研究会などの開催報告

1. 第53回山陰病理集談会

開催日:平成25年9月28日(土)

世話人:島根大学医学部病態病理学講座、並河徹教授

参加人数:31名

- 717 胃腫瘍 山本智彦(島根県立中央病院)他
- 718 十二指腸腫瘍 板倉淳哉(岡山大学免疫病理)他
- 719 肝不全の剖検例 重西邦浩(福山市民病院)
- 720 左腋下腫瘍 吉田 学(松江市立病院)他
- 721 大腿軟部腫瘍 小林計太(鳥取市立病院)
- 722 腎動静脈 石川典由(島根大学器官病理学)他
- 723 乳腺腫瘍 石川典由(島根大学器官病理学)他
- 724 卵巣腫瘍 長瀬真実子(島根大学器官病理学)他
- 725 膀胱粘膜下腫瘍 小田晋輔(岡山大学免疫病理)他
- 726 陰囊腫瘍 長崎真琴(浜田医療センター病理診断科)他
- 727 増強効果および出血を伴う多発髄軟膜病変 桑本聡史(鳥取大学医学部分子病理)他
- 728 末梢神経病変 大沼秀行(島根県立中央病院 病理組織診断科)他

九州沖縄支部

九州・沖縄支部編集委員 相島慎一

第334回九州・沖縄スライドコンファレンスが下記のように開催されました。

日時:平成25年7月13日

場所:久留米大学 筑水会館 イベントホール

世話人:久留米大学病院病理部 鹿毛政義

久留米大学医学部病理学講座

大島孝一、矢野博久、杉田保雄

またスライドコンファレンス半ばで学術講演が開催されました。

演題:“Using imaging in Orthopedic Pathology: Why, When, and How?”

演者:Michael J. Klein, MD Hospital for Special Surgery, New York

発表者 / 所属 / 年齢 / 性別 / 臓器名 / 臨床診断 /

発表者の病理診断 / 討論後の病理診断 / 最多投票診断名

1. 本田 由美 / 熊本大学 / 75 / 女性 / 左肺 / 左肺腫瘍 / Invasive adenocarcinoma with prominent discohesive cells / Invasive adenocarcinoma / Adenocarcinoma
2. 前川 和也 / 宮崎大学 / 70 / 男性 / 咽頭 / 咽頭潰瘍 / EBV-positive mucocutaneous ulcer / EBV-positive mucocutaneous ulcer / Malignant lymphoma
3. 秋葉 純 / 久留米大学 / 62 / 男性 / 咽頭 / 咽頭腫瘍 / Pleomorphic myofibrosarcoma / Pleomorphic myofibrosarcoma / Angiosarcoma
4. 渡辺 次郎 / 公立八女病院 / 50代 / 男性 / 肝臓 / 肝腫瘍 / HCC intermediate type / combined HC-CC / combined HC-CC
5. 盛口 清香 / 宮崎大学 / 70代 / 女性 / 肝臓 / 肝腫瘍 / Lymphoepithelioma-like carcinoma / Lymphoepithelioma-like carcinoma / Lymphoepithelioma-like carcinoma
6. 鹿毛 政義 / 久留米大学 / 4か月 / 女性 / 肝臓 / 肝病変 / Neonatal intrahepatic cholestasis caused by citrin deficiency / Neonatal intrahepatic cholestasis caused by citrin deficiency
7. 宮崎 哲之 / 九州大学 / 36 / 男性 / 脾臓 / 脾腫瘍 / Solid-pseudopapillary neoplasm / Solid-pseudopapillary neoplasm / Solid-pseudopapillary neoplasm
8. 塩見 祐子 / 熊本大学 / 38 / 女性 / 子宮 / 子宮腫瘍 / Endometrioid adenocarcinoma + PEComa / Endometrioid adenocarcinoma + PEComa / carcinosarcoma
9. 甲斐 敬太 / 佐賀大学 / 32 / 男性 / リンパ節 / リンパ節腫脹 / T-cell/histiocyte-rich B cell lymphoma / T-cell/histiocyte-rich B cell lymphoma / Hodgkin lymphoma
10. 西田 直代 / 聖マリア病院 / 28 / 女性 / 左会陰部 / 軟部腫瘍 / Myoepithelial carcinoma of soft tissue / Myoepithelial carcinoma of soft tissue / epithelioid sarcoma
11. 黒濱 大和 / 長崎医療センター / 85 / 男性 / 左腋窩 / 軟部腫瘍 / Atypical lipomatous tumor / Well diff. liposarcoma / Atypical lipomatous tumor / Well diff. liposarcoma / liposarcoma
12. 野口 紘嗣 / 産業医科大学 / 33 / 女性 / 後腹膜 / 後腹膜腫瘍 / Extrarenal retroperitoneal angiomyolipoma / Extrarenal retroperitoneal angiomyolipoma / angiomyolipoma
13. 高橋 庸子 / 福岡大学 / 20 / 女性 / 左腰部皮下 / 皮下腫瘍 / Hidradenoma with follicular differentiation / Hidradenoma with follicular differentiation / Proliferating trichilemmal tumor
14. 島尾 義也 / 県立宮崎病院 / 70 / 女性 / 骨髄 / 骨髄病変 / Mast cell leukemia / Mast cell leukemia / Mastocytosis

第335回九州・沖縄スライドコンファレンス

(臨床との合同コンファレンス、脳腫瘍)が下記のように開催されました。

日時:平成25年9月14日

場所:九州大学 臨床大講堂

世話人:九州大学形態機能病理 小田 義直

コメンテーター:

佐賀大学医学部脳神経外科 松島 俊夫 教授

九州大学大学院 神経病理 岩城 徹 教授

1. 伊東 正博 / 長崎医療センター / 1か月 / 女性 / 左頭頂葉 / 左頭頂葉病変 / Tuberos sclerotic, cortical tuber and subependymal nodule / Tuberos sclerotic, cortical tuber and subependymal nodule / Cortical dysplasia
2. 鈴木 諭・岩城 徹 / 九州大学 / 17 / 男性 / 左前頭葉 / 左頭頂葉病変 / Meningioangiomatosis / Meningioangiomatosis / Desmoplastic infantile astrocytoma / Ganglioglioma
3. 林 博之 / 福岡大学 / 40 / 女性 / 左前頭部 / 左前頭部腫瘍 / Rosai-Dorfman disease / Rosai-Dorfman disease / Rosai-Dorfman disease
4. 福島 剛・佐藤 勇一郎 / 宮崎大学 / 79 / 男性 / 脳 / 脳腫瘍 / HCC intermediate type / Combined HC-CC / Combined HC-CC
5. 竹中 美貴 / 久留米大学 / 96 / 男性 / 頭蓋内 / 頭蓋内病変 / EBV associated primary CNS malignant lymphoma, diffuse, large, B / EBV associated primary CNS malignant lymphoma, diffuse, large, B / malignant lymphoma
6. 中島 慎治 / 久留米大学 / 26 / 女性 / 脳 / 脳腫瘍 / Rhabdoid papillary meningioma / Rhabdoid papillary meningioma / meningioma, papillary
7. 三好 寛明・杉田 保雄 / 久留米大学 / 32 / 男性 / 右前頭葉 / 右前頭葉病変 / Angiocentric glioma / Angiocentric glioma / ependymoma
8. 後藤優子 / 鹿児島大学 / 18 / 女性 / 松果体 / 松果体 / Pineal parenchymal tumor of intermediate differentiation / Pineal parenchymal tumor of intermediate differentiation / Pineal parenchymal tumor of intermediate differentiation
9. 吉田 雅代 / 福岡大学 / 4か月 / 男性 / 松果体 / 松果体腫瘍 / Pineoblastoma / Pineoblastoma / Hodgkin lymphoma
10. 鍋島 篤典 / 産業医科大学 / 3 / 女性 / 脳 / 脳腫瘍 / Pleomorphic xanthoastrocytoma with anaplastic features / Pleomorphic xanthoastrocytoma with anaplastic features / Pleomorphic xanthoastrocytoma
11. 荒金 茂樹 / 大分大学 / 40 / 男性 / 脳 / 脳腫瘍 / Dedifferentiated solitary fibrous tumor / hemangiopericytoma / Dedifferentiated solitary fibrous tumor / hemangiopericytoma / hemangiopericytoma
12. 前川 啓 / 九州大学 / 51 / 男性 / 脳 / 脳腫瘍 / Extrarenal retroperitoneal angiomyolipoma / Extrarenal retroperitoneal angiomyolipoma / angiomyolipoma
13. 下釜 達朗 / 製鉄記念八幡病院 / 55 / 女性 / 舌下神経周囲 / 舌下神経周囲腫瘍性病変 / Solitary fibrous tumor of the CNS / Solitary fibrous tumor of the CNS / meningioma, papillary
14. 渡辺 次郎 / 公立八女総合病院 / 60 / 男性 / 脳 / 脳血管 / Arteriovenous malformation (AVM) in choroid plexus / Arteriovenous malformation (AVM) in choroid plexus / Arteriovenous malformation (AVM)

病理専門医部会会報は、関連の各種業務委員会の報告、各支部の活動状況、その他交流のための話題や会員の声などで構成しております。皆様からの原稿も受け付けておりますので、日本病理学会事務局付で、E-mailなどで御投稿下さい。

病理専門医部会会報編集委員会:村田哲也(委員長)、望月 眞(副委員長)、深澤雄一郎(北海道支部)、増田友之(東北支部)、中村直哉(関東支部)、森谷鈴子(中部支部)、伊東恭子(近畿支部)、串田吉生(中国・四国支部)、相島慎一(九州・沖縄支部)